

七十七ニュービジネス助成金受賞

第19回(平成28年度)

企業  
インタビュー

Interview

## 株式会社セッションナブル

代表取締役 梶屋 陽介 氏



### 会社概要

住 所：仙台市青葉区一番町二丁目7番地5

設 立：平成26年

資 本 金：20百万円

事業内容：エレキギター製造・販売

従業員数：7名

電 話：022 (393) 4540

U R L：<https://glide-guitar.jp/>

## 東北の素材、技術、知恵を詰め込んだオリジナルギター「QUESTREL」を開発、女川で製造し海外展開を目指す

盛夏の候、「七十七ニュービジネス助成金」受賞企業の中から、株式会社セッションナブルを訪ねました。当社は、東日本大震災を機に代表者が起業し、エレキギターの企画・製造・販売を行っています。東北の素材、技術、知恵を詰め込んだオリジナルギターを開発、被災地女川の工房で製造し、女川発の新ブランド「QUESTREL」(ケストレル)で海外展開を目指しています。

当社の梶屋社長に、会社設立の経緯や今後の営業戦略等についてお伺いしました。

### ——七十七ニュービジネス助成金を受賞されたご感想をお願いします。

お取引のある方や役場の方から「応募してみませんか」と紹介を受け応募させていただきました。実際に受賞できたときは素直に嬉しかったです。

当社の事業や製品を評価していただき受賞できた栄誉ですので、評価していただいた分その期待に応えて業績を伸ばさなければいけないと気持ちを引き締めました。いただいた助成金は開発資金として大切に使用させていただきました。

### 震災をきっかけに起業

#### ——会社設立の経緯について教えてください。

学生の頃、音楽が好きでバンドを組んでギターを演奏していました。大学卒業後も音楽関係の仕事をしたと考え、東京の楽器店に就職し、主にエレキギターの仕入れや企画販売を担当していました。東日本大震災時も東京で働いていましたが、被災地の現状を自分の目で見て、楽器店の店員という立場から何かできないかと模索しました。知人が復興支援のため月に数回ほど岩手県宮古市に出かけていたので私も同行させてもらいました。音楽イベントを

通して被災地を盛り上げるために参加してくれるミュージシャンへのオファーや、全国規模の有名なダンス大会の主催者に掛け合っ、東北地区の予選枠を特別につくってもらった等の活動をしました。

そのような活動をきっかけとし、震災復興への貢献を意識するようになりました。もともと30歳で起業したいと考えていましたが、震災復興に貢献し、これまでの経験と知識を活かすには、被災地でギターの製造・販売をすることだと考え、平成26年に会社を設立しました。



当社のショップ「GLIDE STORE」

### ——女川で起業した経緯について教えてください。

起業を決意しどの地域で事業を行うか考え、東北の沿岸部に絞りました。沿岸部で当社のような事業を行えば、町の雇用や産業、観光の発展に貢献できます。とある縁で女川の町を紹介され、女川町長に事業計画をご説明しました。その後、震災からのまちづくりに取り組む役場の職員や観光協会、商工会、若手の経営者の集まりに呼んでいただき、そこでも事業計画を説明し女川の皆様に賛同してもらいました。

そこからはとんとん拍子で女川に工房を建設する話が進んでいきました。女川町は「新しいスタートが世界一生まれる町」というキャッチフレーズを掲げていて、起業家が新しいビジネスを行うにあたって町ぐるみでそれをサポートしてくれます。町の雰囲気や新しいものを積極的に受け入れる町民の方々に触れ、女川町は起業家にとってスタートしやすい町だと思えるようになり、当地で起業することに決め

ました。



震災後の女川町中心部（写真提供：女川町）

起業を決めたときにギターの製造から販売まで一貫して行うと決めていましたので、女川で製造をするなら販売は都会がいいと思い、仙台中心部のアーケード街に拠点を設けようとして計画しました。製品が完成する前に販路を確立させることが重要だと考え、平成26年、女川の工房より先にギターショップである「GLIDE STORE」を仙台市一番町に開店しました。



現在復興中の女川の街並み

仙台にショップを開店させた2年後の平成28年に女川町に工房である「GLIDE GARAGE」が完成しました。工房では、東北の杉をはじめ国産の木材を活かしました。スタッフが集中してギター製造に打ち込むことができる工房にしたいと思い、

ギターの材料である木材を活かした造りであれば、落ち着いた環境になると考えました。内装の壁には県産の針葉樹合板を一面に張り、事務スペースの床には県産の杉を使っています。また展示販売スペースと製造スペースを仕切る移動間仕切りは、地元の建具職人によって女川湾の水平線をイメージして作られています。屋内外で使用するテーブルや作業台の天板も県産の針葉樹合板で作られています。内装の色は、ライブハウスやスタジオ等、エレキギターの演奏環境を連想させギター自体が引き立つような墨色で統一させ、それが元々の柱や木製建具を引き立たせることに繋がっています。見学に来てくれたお客様が気軽に入りやすい工房になっていて、休日になると女川町に観光にきたお客様も当社の工房に興味を持ち見学していきます。中には、県外からわざわざ工房を見学するのが目的で来られる方もいます。



「GLIDE GARAGE」

## ギターで生活をデザインする

### ——経営理念について教えてください。

「ギターの「生産」「販売」「演奏の場の提供」を通して、お客様に心を豊かにすることで得られる充実した日々を提供する」としています。経営理念として掲げていますが、製品にこめたお客様へのメッセージでもあり、ギターを通して生活を豊かにしてもらいたいと考えています。ギターは多くのライフスタイルに溶け込むことができ、その個人個人のライフスタイルに応じて、当社のギターで良い日常

(演奏ツールやインテリア目的のギター)を提供していくことが可能です。お客様がギターがあることで生活が豊かになったと感じていただける価値あるギターを製造していきたいと考えています。

### ——社名について教えてください。

セッションナブルという社名は、企業同士や地公体、大学、地元の人たちと協力をして、何か新しい価値を共に創造していきたいという気持ちで「セッション」という単語から命名しました。当社が女川町で設立したのも、たくさんの方からのご支援やご協力があったからだと思えます。今後も多くの方と協力して女川を盛り上げていきたいと考えています。

また当社の仙台にあるギターショップを「GLIDE STORE」、女川町にある工房を「GLIDE GARAGE」と名付けていますが、この「GLIDE」とは、当社のギター事業の総称「GUITAR LIFE DESIGN」の頭文字で、生活を豊かにするものとしてギターを提供するという意味です。

**GLIDE**  
GUITAR LIFE DESIGN

当社事業のロゴ

## 女川発の新ブランド「QUESTREL」

### ——既存のエレキギターについて教えてください。

昭和初期まで、アコースティックギターの音の増幅は生以外にはマイクで直接拾うものでした。しかし、その場合、増幅された音に楽器が共振するハウリングと呼ばれる耳障りな音が出るという難点がありました。そのため、マイクを通して出せる音量は比較的小さめで、多くの楽器の中でも音量的に遅れを取っているものでした。特にジャズバンドの中では管楽器やドラム等の音でギターの音が消えてしまいます。そこで昭和11年頃、アコースティックギターに直接ピックアップ（マイクと同じような役割をもつ装置）を付けたギターが発明されました。こ

れがエレキギターの誕生になります。その後、奏法や環境、音楽のジャンル等によって様々なエレキギターが誕生し、現在では世界中のエレキギターのデザインは大きく5パターンに集約されています。



従来ギターの一つ

当社では、これまでのようなデザインのエレキギターの製造も行っていますが、「音と表現の革新」をコンセプトに新ブランド「QUESTREL」を立ち上げ、ギターの製造を開始しました。現在のギター業界では、どの企業も同じような構造のギターを製造、販売しています。同じような構造のギターですのでもちろん音にもさほど変化はありません。そのような現状でギター業界に参入するためには、これ



「QUESTREL」ブランドのオリジナルギター「SWOOD」

までのギターとは一線を画す必要がありました。その中でも当社は「音」に特化してこだわらるためにギターの素材や技術等を模索しました。そうして開発したギター「SWOOD（ソード）」は、「音」、「デザイン」とも全く新しいものになりました。

### ——「SWOOD」の素材・音質について教えてください。

エレキギターの素材は従来、安い輸入材木が使用されていました。当社では、国産の木材を組み合わせることによって音の振動性を高めることに注力しました。エレキギターはボディに使用されている木材によって音色がだいぶ変わってきます。「SWOOD」には、北海道の「<sup>ハン</sup>樺」、東北の「<sup>イタヤ</sup>板屋」や「<sup>セン</sup>栓」等を使用しています。これらの木材は近隣の山で見つけることができます。自分の目で最も適した木材を選定しています。

金具には、「コバリオン」を使用しました。「コバリオン」とは、東北大学金属材料研究所の千葉教授が開発し、釜石の株式会社エイワで製造され、公益財団法人いわて産業振興センターが「コバリオン」として、商標登録したコバルトクロム合金です。この「コバリオン」はニッケルの含有量がほとんどないにもかかわらずニッケルの特徴である高延性で高加工性、さらに高耐摩擦性、高耐腐食性を持ち合わせ、しかもニッケルのもう一つの特徴と同様に金属



「コバリオン」を使用した金具

アレルギーを起こしません。大変優れた特徴です。「コバリオン」は、真空溶解法により合金化され、様々な熱処理工程を経て丸棒材として市場に供給されます。整形外科分野の人工関節（股関節、膝関節、肘関節 等）や歯科分野の歯科矯正用ワイヤーや義歯床などに適しています。

このコバリオンの特性をギター製造に活かし、他の金属にはない「弾いた瞬間の音の立ち上がり」や「弾いた後の音の伸び」を極めて高めることに成功しました。

### ——「SWOOD」の製作技術について教えてください。

ギターのネックとボディの結合には、従来よりボンドやネジが使用されています。しかし、斬新で高い音質のギターを製造するため、ネックとボディをより一体化させることにこだわりました。一体化させると音の均等性、均一性が生まれます。そのために釘や金物をほとんど使用しないで木自体に切り込み等を施し、はめ合わせることで木と木をしっかりと組み上げて一体化しようと考えました。そのためその技法で神社や仏閣等の伝統建築を手掛ける宮大工に製造をお願いすることにしました。

陸前高田市には宮大工の中で気仙大工という日本四大名工とされる優れた建築技術を誇る職人集団がいて、その気仙大工に会いにいきました。気仙大工は神社や仏閣が主ですが、民家や建具、彫刻まで幅広い技術を有しており、その多彩な技術力は全国的に見ても高く評価されています。実績としては、関東大震災後の神社や仏閣の復元等があります。また東日本大震災時、被害の大きかった陸前高田市に建築されていた気仙大工による建物は地震の被害が殆どなく、その建物はその後避難所として機能しました。その高い技術力をもつ気仙大工に東北の素材、技術、知恵を詰め込んだギターを製造したいとお話をしたところ、すぐに私がイメージしている結合を実現してくれました。気仙大工は後継者不足が課題になっています。ギターを入り口にして気仙大工の木工技術を若者に継承して欲しいと考えており、当社のギター製造担当には、気仙大工のところで修行させてもらうことにしています。



気仙大工の技術による結合部分の細工

### ——「SWOOD」のデザインについて教えてください。

従来のギターのデザインは約70年間同じ形をしています。70年間培ってきた既存のイメージを崩して新しいデザインを創造することはとても難しいことです。機能的で見た目も美しいことを両立させるためイタリアの名車と言われるフェラーリや新幹線をデザインした山形県出身の世界的デザイナーである奥山清行氏にデザインを依頼しました。当社が女川で新事業を行うことを粋に感じ、快諾していただきました。機能性や構造を理解する工業デザイナーでかつ東北に関わりのある一流のデザイナーに依頼することで、当社が掲げている斬新なデザインのギターが完成すると思えました。

## 圧倒的なエレキギター

### ——「SWOOD」の魅力について教えてください。

これまで説明してきたように①東北地方の木材・新金属パーツを使用し、②岩手県陸前高田で受け継がれている気仙大工の伝統技術を活用し、③世界的工業デザイナーの奥山清行氏によるデザインによって、当社が一からこだわりぬいた国産のエレキギターである「SWOOD」が完成しました。大きさ、重さは従来のギターと同じで、良質な音に特化しています。価格は756,000円と従来のギター価格水準より高めな設定ですがその価格に恥じない製品

です。もっともこだわりぬいた音に関しては、クリアさとヘビーさの両立を実現させ非常に聴き心地の良い音質に仕上がりに、ギタリストたちから評価されています。またギター各弦の音程を決められた高さに合わせてチューニングでは、スタンダードなレギュラーチューニングは当然、弦の張力が弱まる半音から一音下げのダウンチューニングでもその音質の美しさは損なわれません。この音質の良さは他のギターに負けることはありません。結果的にすべて東北に縁のある素材や技術を使用しており、製品の特長の一つですが、高いクオリティのギターを作るために必要だった素材・技術が、たまたま東北に縁のあるものだったのです。気仙大工の技術が岩手県のものでなかったとしても、デザイナーの奥山清行氏が山形県出身ではなかったとしても、同じように依頼したと思います。全てにこだわって製造した「SWOOD」の価値を理解し、所有することをステータスとってくれるお客様にぜひ手に取っていただきたい製品です。

また「QUESTREL」というブランド名は「QUEST(探求心)」と「KESTREL(ハヤブサ)」を組み合わせました。ギタリストへ新たな価値を提供するための探求心と、端正で精悍な容姿、そして俊敏で賢い性質を持つハヤブサをイメージしています。

また発売したギターのモデルに関しては今後増やしていく予定ですが、現在のモデルは日本刀(SWORD)の持つ鋭さと国産木材(WOOD)の持つ温もりをイメージした「SWOOD」と名付けました。いずれは、アメリカやアジアにも売り出したいと考えていて、外国人向けに日本らしさを出すには日本刀をイメージしたギターが良いと思いました。日本刀の持つ鋭さや美しさをギターで表現するために、ギターにも色々な角度を付けて刃物をイメージしやすい形にしています。

## 世界を目指す「QUESTREL」

——今後の事業展開について教えてください。

月産で30本のペースで量産し、これをキープしつつ将来的には月産100本を目指します。その後、アメリカやアジアにも販路を築いていきたいと思っています。日本のギター市場は今後大きな成長は見込

まれません。しかし、アジア市場は、今後5年から10年かけて成長期に入ることが見込まれています。そこですでにギターの成熟市場となっているアメリカ市場に進出し、「QUESTREL」のステータスを確立することでアジア市場、日本市場での販売に好影響が期待できると考えています。

## 利益の追求

——事業を行う上で大切だと思うことをお聞かせください。

事業を拡大し、しっかり利益を確保することです。そのために将来のビジョンを見据えなければいけません。被災地の沿岸部でギターの製造をしているという意義だけでは会社は大きくなりません。皆さんに注目してもらっている現状は非常に有難いことです。しかし、そのことに甘えるのではなく常に危機感をもって利益の追求を図ることが重要です。

当社の事業が成長し、さらに注目してもらうことで漁業中心の女川に新しい産業を増やすことが可能になります。それは雇用にも繋がります。また当社を中心に女川の地で子どもたちへのものづくりを通じた教育の場を提供することで技術職を目指す若手の育成になると考えています。事業規模は大きければ大きいほど当社の利益に繋がり、色んな面での波及効果を期待することができます。



梶屋社長

長時間にわたりありがとうございました。御社の今後ますますの御発展をお祈り申し上げます。

(29. 8. 4取材)